

コムニオーネ・エ・リベラツイオーネの  
成人及び大学生の年度始めの日  
リモート配信にて、2021年9月25日

# 《あなたがたは 賜物に 何一つ 欠けるところがない》

(聖パウロ)



嵐を静めるキリスト 聖マルコ大聖堂、ヴェネツィア © Foto Scala, Firenze

# 《あなたがたは賜物に何一つ欠けるところがない》

(聖パウロ)

## コムニオーネ・エ・リベラツイオーネの成人及び大学生の年度始めの日

リモート配信にて、2021年9月25日

### フリアン・カロン

嵐のような騒ぎの中でカリスマの賜物を証するよう呼ばれるとは誰にも想像することはできませんでした。そして、舟に乗った弟子たちのように、わたしたちもまた、嵐が強ければ強いほど、そしてわたしたちの限界にもかかわらず、キリストの比類のない異例さが浮かび上がってくることに、そして、ドン・ジュッサーニに与えられたカリスマの出来事がわたしたちの血の中に植え付けたキリストへの愛情が深まっていくことに驚きます。

わたしたちの無と主の恵みとの間にある力の差を意識しながら、主の存在の光がわたしたちのうちに妨げられることなく入り込むよう心の裂け目を広げてくれるように聖霊に願いましょう。

### Discendi, Santo Spirito

会場の皆さん、オンラインでつながっている皆さん、ようこそ。この2年間の経験は、このような方法を取ったとしても、わたしたちの心が待ち望んでいることが起こるのを妨げることは何もないことを教えました。違いを生むのは、主に道具、使用する手段ではありません。この場においても、オンラインであっても、1曲目の歌詞の内容を聴きながら、誰もが自分の反応の構造に驚いたと思います。誰が《いない人への懐かしさ》<sup>1</sup>を感じたでしょう？誰もが、今置かれている場所で、人の心を成しているすべての懐かしさが振動するのを一あるいは、振動しないのを一感じる事ができたでしょう。しかし、矛盾するかもしれませんが、その振動に気づいたかどうかは、あまり問題ではないとわたしは言いたいのです。なぜなら、脆弱さのためにこのことさえも自分ではコントロールできないことがあるからです。大切なことは、この曲を作った人が、心の期待に応える「方」に出会ったわたしたちよりも力強くあの懐かしさを感じていることに対して、少なくとも一瞬の痛みを感じる事です。これは大事なことです。この曲の作り手の中で振動したであろうように、わたしも自分の隅々が振動するのを見るのは大変喜ばしいと思います。

しかし、気づかなかったことで自分を責めたりするのは時間の無駄です。なぜなら、すぐに償えるからです。どのように？二曲目を歌いながら、カリスマの恵みに出会わせてくださった「方」にもう一度起こってほしいと願うことで、すでに償ったかもしれません。《わたしはもはや年老いてしまった [わたしは年老いて、わたしの心はもはやすべてが新鮮で新しかった頃のように振動しない] [...] しかし、お望みなら、あなたはわたしを救ってくださる。》<sup>2</sup>

<sup>1</sup> «*Minha luz*», fado portoghese, testo e musica J. Mariano e A. Costa 逐語訳

<sup>2</sup> C. Chieffo, «*Ballata dell'uomo vecchio*», in *Canti*, Società Coop. Ed. Nuovo Mondo, Milano 2014, p. 218

## 1. カリスマの恵み

これまで聞いたり経験したりしたこと、初期の打撃に、わたしたちが生きている歴史的な時世のドラマ、同時代の人たちと一緒に立ち向かっている挑発が映し出されています。わたしたちは、この状況に、この歴史的な非常事態に大きな資産を持って立ち向かっています。それは、わたしたちのもろさ、放心、裏切りにもかかわらず、わたしたちに与えられ、わたしたちの中にまだ場を見出す恵みです。どんな事柄もわたしたちの存在から、わたしたちを魅了し、ここまで引きつけたあの恵みを完全に引きはがすことはできませんでした。

しかし、話の流れの最初のポイントに導入するためにまず言っておきたいことは、今日わたしたちがここにいることほど当然ではないことはないということです。むしろ、このことは、わたしたちをさらなる意識の掘り下げに招くことによって、もっともわたしたちの注意を引き、驚きと感謝の気持ちで満たす事実です。

このことをより強く意識したのは、「不確実な時代に恐れずに生きる」というタイトルの展示でチャールズ・テイラーが話の冒頭で《わたしはどうして、ある時期から「教会」に対して非常に憤慨した多くのケベックの住民と同じように行動することを避けたのだろうか？60年代に突然、反乱が起きて多くの人々が離れて行ったのに、なぜわたしはこの動きに従わなかったのだろうか？》と発言したこの問いに因るものでした。これを耳にして以来、わたしはこの問いを払いのけることができませんでした。この問いは夏の間ずっとわたしの中で沸き立ち、「教会」にとどまるのはもっとも当然なことではないことを、ますます明らかにしていきました。

なぜわたしたちは、同時代の多くの人々のように、「教会」を捨ててしまわなかったのでしょうか？目まぐるしく砂漠化が進む中で、ヨーロッパや西欧（だけではない）の状態を特徴づける、キリストや信仰への従順が絶え間なく激減する中で、何がわたしたちを「教会」に留まらせることを可能にしたのでしょうか？今日わたしたちがここにいることの根拠は何にあるのでしょうか？なぜわたしたちもひきずられなかったのでしょうか？テイラーの問いを直視することは、わたしのうちに限りない感謝の気持ちを引き起こしました。考えれば考えるほど、抑えきれない感謝の気持ちが溢れ、感動のうちに聖パウロがコリントの共同体にいる友人たちに言った《あなたがたは賜物に何一つ欠けるところがない》<sup>3</sup>という言葉思い出させました。この経験から、今年の“年度始めの日”のタイトルが生まれました。

これほど分かりやすいものはありませんから。わたしたちがここにいるのは、わたしたちが砂漠に属していないのは、それは、わたしたちが受け取った恵みによるのです。「教会」全体のために聖霊によってドン・ジュッサーニに与えられたカリスマの恵み、つまり、キリストがわたしたちをご自身に引き付けるために選んだ方法、わたしたちとの説得力のある関係を築くために選んだ方法のおかげです。この恵みが継続し、わたしたちの人生・生活の中で繰り返し起こることが、今日わたしたち一人一人がここにいることの根底にあるのです。さもなければ、わたしたちはどうなっていたでしょう？

《あなたがたは賜物に何一つ欠けるところがない》。コリントの共同体のメンバーのうちに、聖パウロは彼らに与えられた恵みが働いているのを見ました。彼らのあらゆる悪、あらゆる限界、あらゆる過ちでさえも、その恵みを曇らせることはできなかったのです。パウロのまなざしの中には、主の存在の恵みが勝っていて、この場合は彼の証しと教えを通してコリントの共同体に届いていたのです。

---

<sup>3</sup> 第一コリント 1,7

わたしを益々虜にしたこの思いと、ドン・ジュッサーニの《神が望まれるなら、成熟していくほどに、わたしたちは自分にとって、他の人々にとっても見ものとなって行く。その見ものは、限界と裏切りを繰り返す屈辱的なものだが、それと同時に毎朝新たに与えられる恵みの強さによる限りない信頼によるものだ。わたしたちを特徴づける素朴な大胆さは、ここから生じる》<sup>4</sup> というまなざしとを結び付けずにはられませんでした。わたしたちはどれほど多くの裏切りを経験し、それゆえどれほど多くの屈辱を味わっていることでしょうか！しかし、何も一何も！一、わたしたちに与えられ、毎朝新たにされる絶えない恵みに対する信頼を揺るがすものはありません。その支配的な思いはわたしの心を沈黙で満たすのです！

何がカリスマの恵みにこのように感謝させるのでしょうか？なぜこのように根本的な突破口を開いたのでしょうか？それは、わたしたちの完遂と運命への渴望に応じて、信仰が人生・いのち・生活に関連し、これを変え、満たすことができるものであると認識させたからです。ただ《このことが実際に、信仰が理性的であることを証明し、したがって、確信を本質に備え可能にし、自由で満たし、愛と寛大さを実際のものとし、全体として創造性を生み出す》<sup>5</sup> のです。

近年、わたしが何度も引用しているジュッサーニの言葉の一つは、この切実さを強調しています。この切実さに応えることなくして、わたしたちが生きるように呼ばれている世界において、信仰は持ちこたえることはできないのです。《まず家庭と神学校における教育、それから自分の熟考によって、わたしは、現在の経験において見出され、裏付けられ、そしてこれによって確認され、必要に答えるために役立つ信仰でなければ、すべて、すべてが逆の主張をする世の中では持ちこたえられないと確信していた。》<sup>6</sup> 経験の中に見出すことのできない信仰、生活とは無縁の信仰、生活に完全に浸透しない信仰、生活の必要に応えることのできない信仰、人間に力を与えることのできない信仰、“わたしたちをとらえる”ことのできない信仰は、今の時代だけではなく、どの時代においても、過去においては「教会」の文化的、社会的、政治的な重みのため異なるように思えたかもしれませんが、生身の人間を惹きつけることのできない信仰です。

《したがって、何よりもまず、信仰が生活に関わり、理性的で、自由で創造的なものであって欲しいという望みを起こさせた》とジュッサーニは繰り返します。そして《わたしたちを特徴づけるのは、信仰が現在における事実の告知、今ここで起こっている出来事の告知であり、知覚可能な姿である“キリスト信者の共同体”と呼ばれるしるしのうちに存在するという意識である》<sup>7</sup> と続けます。もしキリスト教が人生・いのちに関わる出来事でなければ、もしキリストが今人間を介するしるしの中に存在していなければ、隠喩を用いるのではなく実際に出会うことが可能でなければ、聖霊に定められた具体的ではっきりした方法によって、その神秘的な体である神の聖なる「教会」の中でキリストに出会うことができなければ、人生の要求に応えることも満ち足りた経験を生み出すこともできず、わたしたちは自分を取り巻くすべてのものに翻弄されることになるでしょう。

わたしたちがここにいるのは、時間の中で起こった歴史的で肉体的な出会いによって、ドン・ジュッサーニに与えられたカリスマの恵みが伝えられたからです。その中（カリスマによって）で、キリスト教の

<sup>4</sup> L. Giussani - S. Alberto - J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, Bur, Milano 2019, p. 156. 逐語訳

<sup>5</sup> L. Giussani, *L'io rinasce in un incontro* (1986-1987), Bur, Milano 2010, p. 309 逐語訳

<sup>6</sup> L. Giussani, *Il rischio educativo*, Rizzoli, Milano 2014, p. 20 逐語訳

<sup>7</sup> L. Giussani, *L'io rinasce in un incontro* (1986-1987), op. cit., p. 310 逐語訳

現実と出来事の神秘と、わたしたちの人間性の構造的な願望との合致が、説得力を持ち、教育的に動員力がある、効果的な方法でわたしたちに明らかにされました。《カリスマとは、聖霊、聖霊のエネルギーが、明確な事実を垣間見せる方法、つまり信仰の真理とその変化する能力を垣間見させる方法である。》<sup>8</sup>さて、カリスマは親近感を喚起し、《この親近感は“交わり”と呼ばれる。この生きた交わりの現実を“運動”と呼ぶ。》だからこそ、ジュッサーニは、《一つの運動は「教会」の一部ではない》、むしろ《運動は「教会」を生きる生き方であり、キリストの事実全体の生き方である》<sup>9</sup>と再び述べています。

実際、わたしたちが受け取った賜物は、「教会」と世界のために、特にわたしたち一人一人のために、神がわたしたちの救いのために用意された一連の賜物、すなわち、聖書、洗礼とその他の秘跡、聖体、教皇と司教の権威を豊かにしたのです。ジュッサーニが指摘するように、《各々のカリスマは、最終的には、特定のカリスマ自体を保証するもの、すなわち、恩寵、秘跡、教会の教えに従うことによって、あらゆる場所で「教会」を新たにし、あらゆる場所で組織を新たに作る》<sup>10</sup>のです。最近行われた CL の大学生会の集いで、「不確実な時代に恐れずに生きる」というタイトルの、世俗化についての展示を見た後の大学生が次のように言いました。《山登りの途中、沈黙の中で、もし、この運動に出会っていなかったら、わたしはキリスト信者であり続けなかっただろうし、カリスマに出会っていなかったら、わたしはカトリックの教育を受けたにもかかわらず、無関心になって、おそらく「教会」から離れていただろうと考えて感動しました。わたしが運動の中で出会った人々に愛着を持つようになったのは、彼らと一緒に、永遠に続いてほしいと思うような魅力的な体験、完遂とでも言うべき体験をしたからです。このようにしてのみキリスト教の提案が、わたしの理性や愛情、そして何よりも、展示で言われていたように、わたしの自由を尊重すると考えました。これは、(この何日間に考えたことですが) 人生の挑発、複雑さ、問題に直面しても持ちこたえることができる唯一のものであり、転んだ時に自分を立ち上がらせることができる唯一のものだと思います。つまり、今ここにある魅力的な場所に気づき(あなたや昨日の午後の先生方の話を聞いたり展示のビデオを見たように)、それ以外のもの(ルールや、知っていなければならないこと、しなければならないこと)は二の次であることに気づきました。そして、ここから離れてしまうと、すぐに疲れたり、息苦しくなり、人生は味気なくなることに気づきます。逆に運動の中にいると、人生は再び生き生きとし始め、生き甲斐のあるものになります。》

ドン・ジュッサーニが 1987 年に大学生に向けて、《わたしたちにとって、CL の中にいることは「教会」を生きるために必要となった。永遠の御父が反対しない限り！必要となったのは、信仰を人生・いのちとして認識するよう君が呼ばれた方法だからである》<sup>11</sup>と語った理由が理解できます。

カリスマの恵み、つまり出会いの中でわたしたちを引き付けた魅力によって、わたしたちはキリストの現存を、わたしたちにとって意味と約束に満ちたものとして、また心を成している深みへの応えとして認識しました。かつて、これほどまでにわたしたちの真の望みと一致し、わたしたちの飢え渇く人間性を決定的に抱きしめられることを経験したことはありません。それと同時に、自分自身の行動や浸っている環境によって必然的に被るわたしたちの必要を矮小化から解放し、本来の姿を明らかにしました。出会いの特徴である一致の経験の中で、わたしたちは自分の心の真の姿が浮かび上がるのを見、わたした

<sup>8</sup> L. Giussani, *L'io rinasce in un incontro* (1986-1987), op. cit., pp. 312-313 逐語訳

<sup>9</sup> 同上、p. 313 逐語訳

<sup>10</sup> L. Giussani - S. Alberto - J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., p. 131 逐語訳

<sup>11</sup> L. Giussani, *L'io rinasce in un incontro* (1986-1987), op. cit., p. 389 逐語訳



ちの望みが再び目覚め、人間への愛情が深まり、自分と他人の傷に対する感性が研ぎ澄まされるのを見ました。わたしたちが魅了された出来事への愛着が深まるにつれ、兄弟姉妹の不安や苦悩に対して、出会いの中でわたしたち自身が感じた同じまなざし、同じ優しさを向けているのです。

## 2. あるまなざしへの驚き、カリスマの歴史的影響

リミニミーティングは、このことを裏付けるものでした。会場に来られた方にも、オンラインで参加された方にも、この時世を眺めるための素晴らしい窓口となったと思います。パンデミックによる挑発ですでに浮かび上がっていたものを引き続き確認することができました。その浮かび上がったこととは、わたしたちがニヒリズムと呼んでいるある種の実存的な空虚感の蔓延と、個人および社会的な多くの不安、当惑、苦しみの状態です。

ある友人が《ミーティングでは、特にテレビシリーズに関する展示、世俗化に関する展示では、飢え渴く人間の叫びがはっきりとした形で現れていました。その叫びはより多様な形で表現されていました》と書いてきました。この同じ叫びは別の展示でも聞かれました。例えば、*Io, Pier Paolo Pasolini* わたし、ピエール・パオロ・パズリーニと題された展示では、《何かがいつも欠けていて、わたしのすべての直観の中に空虚がある》<sup>12</sup>や、*Tu sei un valore* あなたは価値があると題されたローズの仲間的女性たちの展示では、《わたしは誰？》という問いかけを皆が口にしていたことを思い浮かべます。またレディー・ガガの歌の中の叫び《Tell me somethin' girl/ Are you happy in this modern world?/ Or do you need more?/ Is there somethin' else you're searchin' for? 聞かせてくれないか/君は本当に現代の世界にいて幸せなの?/それ以上は望まないの?/君にはまだ探し求めるものがあるはずだろ?》<sup>13</sup>を思い出します。

つまり、人間のより深く、より不快な問いが表面化してきたのです。各自、自分が経験した反動の中で、それらをどのような姿勢で生きてきたかを確認することができたでしょう。1990年代の初めにジュッサーニは《今日の人間を特徴づけるものは、存在への疑念、存在することの恐怖、生きることもろさ、自分自身の実質のなさ、不可能なものへの恐怖、自分と理想との不釣り合いの恐怖》<sup>14</sup>と述べていました。

わたしたちの間でこの人間の叫びをはっきりと聞いている人は多くいます。別の人には、《わたしが見ているものから言うと、世界は特殊な時期の只中にいます。わたしは傷ついた人にしか会えないような気がします》と書いてきました。しかし、この傷は、率直に言うと、感情がなくなっていないなら、何よりもまずわたしたち自身の傷であることを各自認めることができるでしょう。そのため、自分の経験から自身の傷に気づかされればされるほど、他人の傷を身近に感じるようになることができます。同時に他の人々の傷は、自分自身の傷をより意識的に見出させてくれます。

---

<sup>12</sup> P.P. Pasolini, «VI. L'alba meridionale», da Poesia in forma di rosa (1961-1964), in Id., Bestemmia. Tutte le poesie, vol. II, Garzanti, Milano 1995, p. 801 逐語訳

<sup>13</sup> Lady Gaga e Bradley Cooper, «Shallow», dall'album A Star Is Born, 2018, © Interscope Records

<sup>14</sup> «Corresponsabilità», Litterae Communionis-CL, n.11/1991, p. 33. 逐語訳

このように自分自身と他人の傷を見つめることによって、《今日の世界は、福音の時代に見られた惨めさのレベルに引き戻されている。イエスの時代には、誰が正しいかではなく、どう生きるかが問題だった》<sup>15</sup>というドン・ジュッサーニ自身のまなざしにわたしたちは驚かされることでしょう。

今もそうであるように、わたしたちにとって、わたしたちの人間性を丸ごと見つめてくれた現実との出会い、わたしたちの中に真実を直観し、惹きつける力と希望を呼び覚ました出会いがどれほど決定的なものであったことでしょうか。それと同じことが、わたしたちが会う人々に、自分たちの人間性の叫びを隠さない人々に起こるのを目の当たりにします。先ほど引用し、冒頭に《わたしは傷ついた人にしか会えないような気がします》とあった手紙の主は、その続きに、その傷ついた人々は、《その傷が理解され、愛されていると感じると、もう決して離れて行くことはないのです》と付け加えています。この人々を離れなくさせるのは、自分の傷を抱きしめているまなざしに気づいて驚くことによるのです。

それは、わたしたちに起こり続けていることと同じです。TV シリーズ展を訪れた後、ある女性が展示の世話人の一人に宛てた手紙を読めば理解できると思います。《身を焦がす問い。テレビシリーズの世界での出会いと発見と題する展示の終わりに、その展示会場を訪れたことに感謝しました。若者と、未来を舞台にしたフィクションの登場人物の語りを聞きながら、自分の人生や傷、とても脆い自分について考えました。わたしはそれらを見つめたいと思っていることに気づき、それについて誰かと話したいと思い始めました。なぜそう望んでいるのかと自問自答したところ、今回の展示で見た光にたどり着くために、それらを乗り越えたいからだと答えました。わたしが見たこの光は、展示の中でもっとも美しく、もっとも驚くべきものです。どこにあるのか、わたしが見たこの光は何なの？それは、登場人物たちが経験した暗闇や苦しみ、痛みのトンネルの先に見える光です。この展示の世話人と、ガイドの言葉がこの光に導くのです。世話人たち自身がわたしたちを待っていて、わたしたちの質問や考えに耳を傾けるのです。展示を見終わった時、なぜ世話人は、このような、自分のことを語れるような展示を考えたのだろうか？と自問しました。どう答えていいのかわかりません。とりあえずわたしが大人の世界に入った時の苦しい時期のことを考えました。大学の後半には、カウンセラーの所に通うようになりましたが、どんどん悪化していきました。わたしは今でも展示のことを思い出しては、つい最近のこの体験と、カウンセラーに会ったときの体験との違いは何だろう？と考えこみます。すると、“なぜこの人たちは、わたしに、本物のわたしに出会うことを望むのだろうか？”という一番気にかかる問いが湧いてきます。そしてすぐ後に“わたしの目を見るガイドや世話人たちの目を見て、自分は傷だらけなのに生きている、愛されていると感じるのはなぜだろう？なぜ展示の後、わたしは生きたい、存在したい、幸せになりたいと思い、自分自身について話しながら、自分の傷に押しつぶされないことに気付いたのだろうか？世話人たちはなぜ、わたしの人生、傷、問いに耳を傾ける勇氣があるのだろうか？彼らは何者？どうして彼らはあるのだろうか。わたしの話に耳を傾け、わたしを受け入れることができるのだろうか？”という多くの問いが生じました。彼らの心の広さが見えました。彼らを知り、彼らに従いたいと願います。彼らの心の広さは、ミーティングの人々、ボランティア、ミーティングの展示や講演会を企画制作した人々、ここにいる友人たちに見られるのと同じものです。わたしはこれらのことを考えながら、わたしの両親や、仕事や何かに追われていた

---

<sup>15</sup> «Corresponsabilità», Litterae Communionis-CL, n.11/1991, p. 33. 逐語訳

70年代の多くの親たちのことが頭に浮かびました。自分のことを誰かに話したい、見てもらいたい、愛してもらいたいという子供の頃の望みと必要が叶わなかった大きな痛みを覚えています。その時に両親が話を聞いてくれなかったか、わたしが失敗したので彼らに理解してもらえなかったのだと思います。けれども、展示を見終わる頃、世話人と話をするうちに何か新しいことがわたしに起こりました。それは、両親を非難するのでも、自分の過ちに左右されるのでもなく、彼らを赦し、自分自身を赦したいという望みがわたしの中に生まれたことです。わたしが目の当たりにしている世話人やミーティングの人々は、ある意味でわたしにとって、家族より身近な存在だからです。神の恵みで、わたしの人生の中で何度も起こったこと、つまり証人を通して現存するキリストとの出会いが、再びわたしの身に起こっていると感じています。だから、この世界の中で一人ではないと感じているのです。》

このような出来事は、数え上げればきりがありません。(Tracce(あしあと)で読むことができますが)イラリアを驚かせた話のように。オンラインレッスンの最後に、生徒の一人が個人的なことを聞いてもいいかと訊ねました。なぜ自分になのかとその理由を訊ねると、《こんなことを聞ける人はあまりいないから》<sup>16</sup>という答えが返ってきました。あるいは、自閉症のある症状を持つ少年の母親の感動的な驚きです。彼女は、息子の興味のなさや根拠のない恐怖心が、運動に参加している教師のまなざしによって、月が経つほどに打ち消されていくのを目の当たりにしました。その教師の継続的でささやかな勧めによって、学校に行くのを楽しみにするほど、クラスメートとの関係に巻き込んだというものです。または、まったく自由ですべてに開かれた超進歩的な新聞を編集している少年たちの“女ボス”とある教師の間に起こったことも印象的です。彼女は、他の人には内緒で、恥ずかしそうに彼のところにやってきて、《(あることについて)みんな同じように考えるけれど、わたしは別の何かを示してくれる人が必要なのです》と言ったのです。あるいは、ある少年のグループが先生と一緒に山へ行こうと執拗に誘うことにも驚かされます。彼女は躊躇し、抵抗しようとしたのですが、彼らは諦めずに何度も何度も誘ったので、最後には屈服してしまったと話します。そして、彼らに合流する道すがら、彼女は《でも、なぜこの少年たちはわたしを誘うのだろう、わたしにいてほしいと思うのだろう?》と自問したそうです。

これらの事実の中で、わたしたちは何が振動しているのを見るのでしょうか?カリスマによって活性化された信仰、自分の傷や必要性、疑問に気づき、暗黙であろうと明瞭であろうと、自分の貧しい人間性を抱きしめることができるまなざしを求め続ける人の人生に信仰の歴史的な反響、影響を及ぼす力です。まさに、これらの傷に気づくことこそが、人を《出会いの道に導く》<sup>17</sup>ものであり、その重要性を認めさせるのです。これらの経験の中で、人生におけるもっとも決定的な問題は、**重要な存在**、つまりジュッサーニが言っていた《存在である人》<sup>18</sup>をキャッチすることであることがわたしたちの目の前にはっきりと現れてきます。《存在である人》、つまり自分の人間性を恐れないことで、他の人が自分自身・それぞれの人間性を恐れないで見つめることを可能にする人です。教皇がよく言われる《隅に追いやられたすべての人(回勅 福音の喜び20)》に信仰の証人となるということの新たな意味です。

---

<sup>16</sup> «Perché lo chiedi a me?», Tracce, n. 8/2021, p. 30 逐語訳

<sup>17</sup> L. Giussani, *L'io rinasce in un incontro* (1986-1987), op. cit., p. 362 逐語訳

<sup>18</sup> L. Giussani - G. Testori, *Il senso della nascita*, Bur, Milano 2013, p. 116 逐語訳



そういう人に会うことで、問いが鎮められたり、消されたりすることはありません。とんでもない。これまで見てきたように、《彼らは何者なの？ どうして彼らはあのようなにわたしの話に耳を傾け、わたしを受け入れることができるのだろうか？》と、問いをさらに爆発させるのです。手紙を書いた友人は諦めずに、《なぜ世話人は、このような展示を考えたのだろうか？》《どう答えていいのかわかりません。》《なぜなら、答えは彼ら自身だからです。この展示を訪れたことによって、友人に出会えたことを実感しています。なぜなら、彼らがしている真に人間的な行為を見て、自分もしたいと望んでいた行為を自分がしていることに気づくからです》と言います。これが友情の原点です。友人とは、自分自身に対する真に人間的な行為を可能にしてくれる人です。こうして、自分に必要な友人が誰なのかをキャッチするのです。このようにして、自分の渴きを真剣に受け止める「方」を前にしたサマリアの女性の見開いたまなざしが再び起こるのをわたしたちは見ることができるのです。

この意味で、わたしは教皇フランシスコがスロバキアの司教たちを前にして、「教会」が世間から遠ざかり、離れたところから人々の生活を見るのではなく、人々の実際の生活に分け入り、彼らが本当に必要としているものを調べるようにと促された言葉<sup>19</sup>に非常に感銘を受けました。

驚かせるのは、異なるまなざしです。わたしたちの人間性を織り成す深い部分、わたしたちの真の必要、渴きを抱きしめると同時に、それを明らかにするまなざしです。この手紙の友人は多くの人と出会ったかもしれませんが、すべての人が彼女の飢え渴いた人間性を抱きしめることができたわけではありません。

このことは、現在、与えられた状況下で起こるのです。まさに今、この場所で、人間がバラバラにされていく中で、このような存在、存在である人々の存在に驚くのです。まったく当然なことではありません。だからこそ、テイラーの問いかけの重要性がさらに明らかになるのです。

また、ブラチスラバで教皇は、もはや信じず、信仰の意味を失った人々に対して、自由で創造的であることを勧められました。どのように？ 《不平を言ったり、防御的なカトリシズムに帰依したり、悪しき世界を裁いたり非難したりすること》を避け、むしろ《突破口を開けること》、つまりレナード・コーエンの言葉を借りれば、すべてのものの中にある突破口を見出して、《福音を告げるための新しい方法、やり方、言葉》<sup>20</sup>を見つけることだとパパ様は続けられます。

---

<sup>19</sup> 《自分を世間から切り離さず、離れたところから生活を見るのではなく、その中に住む謙虚な「教会」は美しいものです。中に住む、このことを忘れてはなりません。分かち合い、共に歩み、人々の問いや期待を受け止めることです。このことは、自己中心的な立場から抜け出すのを助けます。[...]逆に、人々の実際の生活に分け入り、わたしたちの民の霊的な必要と期待は何であろうかと各自自問してみましょう。》(フランシスコ、司教、司祭、修道者、神学生、カテキスタとの会合での演説、2021年9月13日、ブラチスラバ) 逐語訳

<sup>20</sup> 《わたしたちの背景には豊かなキリスト教の伝統がありますが、今日の多くの人々の生活の中では、もはや意味がなく、人生・生活の選択を導くこともない過去の記憶の中に留まっています。神の意味や信仰の喜びが失われていく中で、嘆いたり、擁護的なカトリック信仰の陰に隠れたり、悪しき世を裁いたり非難したりしても始まりません。必要なのは福音の創造性なのです。[...]おそらく、信じない世代、信仰の意味を失った世代、信仰を習慣や多かれ少なかれ受け入れられる文化にまで矮小化してしまった世代に直面したとき、わたしたちは突破口を開けて創造性を発揮しようではありませんか！自由、創造性…福音を宣べ伝えるための新しい方法、やり方、言葉を見つけることができるのは、なんと美しいことでしょう！》(フランシスコ、司教、司祭、修道者、神学生、カテキスタとの会合での演説、2021年9月13日、ブラチスラバ) 逐語訳

### 3. 自己意識の歩み

両親を非難するのではなく、両親と自分自身を赦したい、自分の過ちに決定されたくないと思うほどの自分の傷や《限りない闇》を見つめることができるような、そのように抱きしめられると感じられる場所をどう説明できるでしょう？手紙で読んだように、彼女は一つの展示を訪れたことで自分が生まれ変わったことを実感したのです。当然ですが、その展示が隕石のように空から降ってきたものではなく、青天の霹靂のようなものでないことは明らかです。この展示の実現に関わった人たちは皆、その背景にある信仰の経験に漬かって生きています。この展示に表れたまなざし、世話人たちが示し、手紙を書いた女性が捉えた人間性は、何らかの戦略や芸術的な創造性の結果ではなく、一つのカリスマに活性化された「教会」の現実との出会いの実りです。このカリスマは展示の制作者それぞれを魅了し、彼らの中に新しい《自己》を生み出す人間としての歩みに自身をかけるよう急ぎ立てたのです。この出会いが、彼らの異なるまなざしを形づくり、あの人間としての歩みの成果を分かち合うために訪問者に近づくことを可能にしたのです。

キリストが「教会」の中でわたしたちに達する歴史的な方法や、そこから生まれる仲間の価値に気づけば気づくほど、つまり知性と愛情をもって出会った出来事に従い、カリスマの恵みに従いながら、その恵みによって自分自身が生み出されるようになればなるほど、自分自身の実質が確固としたものになるのです。

あなた方の一人がこの数年どのように歩んだかを語っているので聞いてみましょう。《16～18歳の頃は、心の中に湧き上がる望みや要求のせいで、自分は世界で一番不幸な人間だと思っていました。運動との出会いで息をつくことができました。なぜなら、わたしの中の気がかりが、初めて自分を非難するものではなく、手段として好意的に見られたからです。わたしが運動に愛着を持ったのは、わたしの落ち着かない心に対して比類のない一致を見出したからです。しかし、正直なところ、10年間の熱意に満ちた美しい人生・生活の後、わたしの人間性や歴史で未解決のものが残されていました。わたしは他の人より変わり者なのだろうかという、昔の疑念がよみがえってきました。なぜこのことを話しているのか。なぜなら、カリスマがわたしの中で開花したのは、わたしが自分の人間性のすべてを、理解できないものも含めて真剣に受け止めようと決意した時（状況に強いられて）で、同時に、カリスマを道として、仕事の仮説として提案してくれる人を目の前に見出したからです。つまり、その人はドン・ジュッサーニの提案を矮小化しないように、また、カリスマが花開く土壌であるわたしの人間性を何も隠さないように、わたしを挑発したのです。これは本当に重要なことです！その時から、カリスマはわたしの中で根源的なものになりました。その瞬間から、カリスマはわたしのうちに、以前わたしを襲った信仰に対する同じ異議を持つ人々にとって新鮮なものとなりました。その時からわたしは教育者になりました。CLの大学生会の若者たちの教育は、わたしが出会ったカリスマに対する責任を生きるための貴重な機会になりました。ドン・ジュッサーニが言うように<sup>21</sup>、わたしは最初から、彼らを説得するのではなく、彼らの前で生きなければならぬことを理解しました。わたしは、自分の人生・生活と自分の飢え渴いた人間性を持って、彼

---

<sup>21</sup> 《彼らの前で自分自身であるべきで、彼らを説得するのではない。》(L. Giussani, *L'io rinasce in un incontro* (1986-1987), op. cit., p. 366 逐語訳

らの人生・いのちに関わりました。このため、朝の目覚めから自分の飢え渴いた人間性を生きること、自分の必要の本質を意識することがいかに決定的であるかに気づきます。すると、自分の必要との関連性を確認しながら、カリスマが自分の中で生きてくるのです。それと同時に、若者たちの人間性や、決して当たり前のことではない彼らの問いにも驚かされます。キリストの現存の出来事による一致に対する彼らの驚愕に、わたしが一番に驚かされます。彼らの前では、わたしはカリスマの専門家でもなければ、リーダーでもありません。答えを与えるのではなく、個人的な歩みへと挑発することで、彼らの個人的な確認を促すことが自分のもっとも大切な関心事だと肌で感じました。もし彼ら自身が立ち向かうべきドラマに介入し、個人的な発見を妨げていたら、どれほど多くの素晴らしいものを見逃していたことでしょうか！こうして、この数年間でドン・ジュッサーニのカリスマと彼らの人間性との出会いを通して、何人かの若者の自己が生み出されるのを驚きをもって目撃しています。カリスマを新しくする自己、この自己は同時に他の人々を生み出し始めています（彼らが教師として高校で出会った若者たちを思い浮かべます）そして、その若者たちが今、CLの大学生会を新しくしているのです。わたしは、カリスマが彼らの経験の一部になっているからこそ、誰も彼らを馬鹿にできないと断言できます。》人が《わたし》と言い始めると、他の人々の《わたし》が花開くことに驚くのです。

運動との出会いから始まる歩みの結果はなんでしょう？その実りは、キリスト信者としての自己意識の強さで、後にそれがまなざしの中に、展示、仕事、愛情経験に表れるのです。なぜなら、《主体の力はその自己意識にある》<sup>22</sup>からです。ですから、このような明確で熱意のある自己意識を持った人に出会うと、誰も衝撃を受けないではいられないのです。

あの展示を訪れた女性が望むような自己意識を、わたしたち一人一人はどのようにして、自分のものにできるのでしょうか。この質問にドン・ジュッサーニ自身よりもうまく答えられる人がいるのでしょうか。1976年に行われたCLの大学生会の黙想会で、大学生や初めて参加する人たちに向けて彼が語った言葉に耳を傾けてみましょう。わたしたちが立ち向かっている状況にぴったりなので、今日のために考えられたと思えるようなものです。わたしがこれを提案するのは、ここ数ヶ月の間にこれを聴いて以来、どうしてももう一度聴きたくなり、自分のものにしたいという思いに駆られたからです。ドン・ジュッサーニの生誕100周年を迎える今年の初めに、皆にこれ以上の素晴らしい贈り物はできないと思います。では、その講話の一部を聞いてみましょう。

---

<sup>22</sup> L. Giussani, *Il senso di Dio e l'uomo moderno*, Bur, Milano 2010, p. 132 逐語訳

コムニオーネ・エ・リベラツイオーネの大学生会の黙想会におけるルイジ・ジュッサーニの講話より  
(リーヴァ・デル・ガルダ、1976年12月5日)

2021年9月25日の「年度始めの日」の際に再生された録音を文字化したものであり、コムニオーネ・エ・リベラツイオーネの兄弟会の資料館に保管されている

監修者 フリアン カロン

ルイジ・ジュッサーニ

これが私たちを物事の底辺から真実に縛り付けるものだ！それは、何よりもまず、そして直接的に社会の円滑な運営やより人間らしい共存を可能にするものではない。また、物事の正しい方向への転換への協力や、権力の抑圧や暴力に満ちた偽りからの解放ではない。そういうことではない。なぜなら、こうしたことが最も重要であるなら、政党をつくり上げることができるからだ。しかし、私たちの運動は、第一に、そして直接に別の目的がある。それは、私たち自身を、私たちの人格を動かすことだ…

申し訳ないが、このことほど人間として衝撃的で、真実だと言えるものは他にはない。つまり、キリストの《何の得があらうか》というこの一文ほど、人間的に当然でありながら、[同時に]衝撃的なものはない。頭に浮かんだことを全て成し遂げて、《全世界を手に入れても》、《自分自身の意味を失ってしまうなら》何の得があらうか、と言うのだ。自分の魂を失うのだ。《自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。》<sup>23</sup>あるイデオロギーを主張することだろうか。社会の中で説得し合う立場を取ったり、こぶしを握ったり、火炎瓶で怒りを発散させる暴力に走ったり、快適な時間や日々の積み重ねることか、あるいは、学識に対する好奇心だろうか。それが知的なものである場合には、対象を知るための手段と対象そのもの、益々明らかになっていく自分自身の能力と現実の謎の間にある不均衡に対する怒りや精神的な苦痛に化すしかないのだ。《人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があらうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。》

---

<sup>23</sup> マタイ 16,26-27 参照

自己意識。これは4年前に初めて使った言葉で、それ以来、常用語の一つとなっている。この言葉はあまり詩的ではないが、ぴったりだ。自己の意識、自己は矮小化できないと感ずることだ。《自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか。》

自己は矮小化できないと感ずることだ！なぜなら、[他に]存在しないから、《私》という言葉をおずかでも注意深い愛情で発音した時に、何よりも明らかなものは何だろうか。何があるだろうか。この《私》と発音する時ほど顕著なものが他にあるだろうか。人は矮小化できない現実を主張している、肯定していると感ずくのだ。昨日、今日、明日、すべての歴史の中で、永遠にその言葉で呼ばれることのできるものは他にない…

人生の新しさは、この自己意識、自己の感ず方、この自分自身に対するまなざしと味味の成熟度に比例していると言える。すまないが、主体が、言い換えると、全てのものの顔を生じさせ、湧き出るところ、実質を得る元に、言い換えると、あらゆる関係、つまり、あらゆる行動、あらゆる動きが生じる元に「私」があることを理解しているだろうか。私！

ある法則、皆が心に留めておくべき法則がある。この自己意識の法則、この自己意識のいのちの法則、この自己の法則、この私という人格の法則がある。この「私」に支払え得る代価はない。パスカルが言ったように、《この人は何だろうか？膨大な空間の中の見えない一点である。》しかし、もし宇宙全体が、世界全体が、この私の上に突進してきたとしても、あらゆる表面的な安定性の中で、このはかない一点に、私を押しつぶすために突進してきたとしても、《私は宇宙や世界よりも偉大なのだ。なぜなら私は何が起こっているかを理解しているからだ。》<sup>24</sup>理解している、私の中には、この計り知れない天変地異の手を逃れ、それを明確にとらえ、外から把握し、理解する何かがあるのだ。この私の人格の代価を払えるものは何もない…

君たちに一つの法則があると言った。その法則とは、自分のアイデンティティを認識し、愛する…自分のアイデンティティを認識し、愛するのは、《他者》を認識し愛することによると表現しよう。愛する能力が芽生え、湧き上がってくるのは、他者を認識し、愛することによるのだ…

私たちは愛し、認識し、そして他者を愛する。男性が女性を真に認識し愛するのは、自分自身に対する

---

<sup>24</sup> B. Pascal, *Pensieri*, n. 231, in Id., *Opere complete*, Bompiani, Milano 2020, p. 2393 参照 逐語訳

認識と愛のエネルギーを投影するときのみだ。なぜなら、福音書にも《自分を愛するように隣人を愛しなさい》<sup>25</sup>と書かれているからだ。他者を愛する基本的な基準は、私の自分自身に対する愛だ。

何度も繰り返してきたが、私たちは自分自身を愛していないから、他人を愛することができないのだ…

自分が父親と母親に愛されていること、あるいは愛されたことを認識していないと、人は愛することもできないし、友情も築けないのだ。心理学を学んでいる人は、このことをよく知っている。心理学的にも裏付けられることだ。自分が必要とされ、望まれ、自分が望まれ、愛されたこと、自分が愛されていること…これらは健全な精神の基本だ。誰もが知っていることだ。しかし、この中にある法則の仕組みについては誰も考えない…

もし、すべてが、母と父が、女性と男性が、称賛と熱意をもって見出されないなら、まさにこの発見から始まる観想のうちにするしとして見出されないなら、私たちの存在の根源的な仕組みのしるし、私たちを存在とならしめる「存在」—存在！—しるしとして見出されることはない。なぜなら、この瞬間の自分の存在を自分自身で与えることはできないからだ…望まれている、存在するというのは、絶えず望まれているということだ。望まれる、つまり、愛されているということは、スクオラ・ディ・コムニタの隠喩で言えば、瞬間ごとに無から呼び出されるということだ。神よ、「あなた」が私を望まれることが私の自己の実質だ…

人は「他者」を愛することによって自分自身のアイデンティティを愛する…誰からも注目されなくても、このことに気付いた人は自由で安定している。もしかしたら、悲嘆にくれたまなざしで現実を見ているかもしれない、しかし、痛みは最も健全なものだ。聖書の言葉で言うなら、復活や栄光と全く同じように。栄光や復活、命は十字架、痛みを通るから…

《私が持っているのは、私が与えたものだ》<sup>26</sup>とダヌンツィオが言っていた。これほど幻想的で、真っ赤な嘘はない。《私の実質は、私が与えたものである》という定義になる…被造物には、人間には相応しくない定義だ。《私が持っているのは、私が与えたもの》のみ。それは、反応としての実質、暴力としての実質、反応と暴力としての実質の称賛なのだ。

---

<sup>25</sup> マタイ 22,34-40 参照

<sup>26</sup> Motto inciso all'ingresso del «Vittoriale degli Italiani», Gardone Riviera (BS), dove il poeta e romanziere Gabriele D'Annunzio è sepolto. 詩人で小説家のガブリエーレ・ダヌンツィオが埋葬されているガルドーネ・リヴィエラ (BS) の「Vittoriale degli Italiani」と呼ばれる彼が住んでいた邸宅の入り口に刻まれた座右の銘。逐語訳



私は与えられたものを持っている！これが正しい表現だ。私が持っているもの、私自身、私の実質、私が持っているものは、私に与えられたものだ。これを認めることが自己意識であり、そこから自分自身や自分の人生・いのち、他の人や他の人の人生・いのちに対する愛情が生じるのだ。そこから人間、人間性がほとぼしる…

私に意識があればあるほど、つまり私の人格が確かであるほど、出かけて行き色々な物を見、人々に話しかける時に、内部にありながら、私はつくられているという意識が透けて見えるのだ。私を成しているこの存在の、私を成しているこの「あなた」の意識が。その時、祈りは日常生活の一部となるのだ…

これは年を取るにつれて私の魂に掘られた底知れない深みだ。けれども、それは高校時代から私のうちに掘られていったものだ。なぜなら、高校時代からのことを感じていたから…これが自由の力であり、これが創造力であり、そしてこれが愛の力だ。これが愛情の力なのだ！ わかる？これが人間というものであり、これに由来する。つまり、人間を生じさせる母体、子宮だ…

この深遠なる未知の存在、この「謎」、得も言われぬ神、目も鼻も口もないこの「あなた」、私の自己に実質を与えるこの生きた神秘は、人となり、そして《父よ》、《母よ》、《婦人よ、泣かなくてもよい》、《あなた方も去って行きたいのか》、《偽善者たち！》と言っていた、《理解できない者、混乱し、疲れている者は皆私のところに来なさい》、《どうか父よ、私たちが一つになるための力をお与えください》、《私はもはやあなた方を僕とは呼ばず、友と呼ぶ》と言っていた、《あなたがたの師は一人だけで、私だ。あとは皆兄弟なのだ。あなた方は私を“先生”と呼ぶが、それで良い。実際にそうである》、《あなた方の中で罪のない者が最初の石を投げなさい》と言っていた、《私が何か悪いことをしたり、悪いことを言ったのであれば、言って欲しい。正しいこと言ったのなら、なぜ私を叩くのか》、《父よ、なぜ私をお見捨てになったのですか》と言い、そして《成し遂げられた》と叫んだ。なぜなら、その前に、人間、すなわちアブラハムの偉大な言葉、《父よ、私の望みではなく、あなたのお望み通りに行われますように》<sup>27</sup>という“偉大”な言葉を言ったからだ。存在の本質は「あなた」だ。私の実質は、人間の私の手探りの想像ではなく、私のいのちの渇きという儂い様ではなく、私のいのちの真の源、私の源である「あなた」だ、私の栄光である「あなた」。

---

<sup>27</sup> マタイ 26,42、ルカ 22,42 参照

この自己意識は、すなわち主の「存在」の意識なのだ。私たちの間に主が存在するという意識だ！自己意識が、その究極で深遠な内容として、私の深みから私を成している「他者」に唾然とし、知覚し、驚きをもって発見し、賛美することであるなら、この「他者」は一人の人間になり、私たちの間の一人の人に！ 私たちが「あなた」と言うことができる人になった。顔、目、鼻、口がある人だ。手を握ることができる人、寄りかかることができる人、肩に寄りかかることができる人、頭をもたせかけられる人に…

もし、自己意識の究極の内容が、私をつくっているこの現実、つまり神であるならば、[そして]個人の存在の大きさがこの宗教心、この背景、この「あなた」、この「謎」なら、それは私たちのうちの一人になった「あなた」だ。《誰も神を見たことがないが、御子によって示された。》<sup>28</sup>《私を見る者は、御父を見る。》<sup>29</sup>私たちのうちの一人！《すべてのことを私の記念として行いなさい。》<sup>30</sup>記念、つまりこの「存在」の認識、今自己意識を持つこと、この出会いに呼ばれた人間としての自己意識、キリスト信者としての自己意識…

《私たちもあなたのおっしゃることは何もわかりませんが、あなたから離れて、どこに行きましょう？ あなただけが命を与える言葉を持っているからです。》<sup>31</sup>二千年前の新しい人生・いのちとはどんなものだったのだろう（自己意識とは、人生の新しさであり、人生の新しさを表していると言った。人は、自覚を持てば持つほど、人生の新しさを感じるのだ。）？主と一緒にいること！二千年前、新しい人生とは、主と一緒にいることだった。[何という]自由の感覚、自己の実質の感覚だろう！《権威を持って話すこの人こそ》、私に実質を与える！主と一緒にいることだった。よって、律法学者やファリサイ派の人々、そして好奇心や見返り、あるいは奇跡を求めてついて来ていた群衆はこの人生の新しさを得ることなく離れて行くのだった。彼らは、そこにいて、目を見開いて主の話を聞いたり、主が起こす奇跡を見たりしたわずかな時間を除いては、人生の新しさを感じなかつただろう。

二千年前、新しい人生は、主と一緒にいることだった。「彼」の存在と共にいると、沸き立つように、自分が新しくされるようになり、新しい自己が生じ、生まれるのだった！

その透明で澄んだ実質を持つ自己が生じたのだ。生き生きとした力、愛することへの渴望と能力、その人

---

<sup>28</sup> ヨハネ 1,18 参照

<sup>29</sup> ヨハネ 12,45 参照

<sup>30</sup> ルカ 22,19 参照

<sup>31</sup> ヨハネ 6,68 参照

間性を持って、つまり、自分自身の中に人間性が生まれたのだ。ヨハネ3章では、キリストの所へ来たコデモに《人は、新たに生まれなければ…はっきり言うておく…あなたは新たに生まれねばならない》と言った。現実を理解したいなら、現実の中に入りたいなら、新しく生まれなければならないのだ。このようにして新たに生まれたのだ。

つまり、君たち、自己意識は信仰だ…信仰は主の存在を認めることだ…これが信仰だ。そして、これが自己意識、自意識だ。自分の時間や日常の中で、この「存在」の意識を何度もよみがえらせるほど、すべてのことをやりながら…キリストよ、「あなた」の存在の意識を取り戻せば取り戻すほど、私のアイデンティティはより力強くなり、自分自身に対する優しさ、私に対する「あなた」の憐れみはより深くなり、他の人々との関係において創造力はより豊かになる！コロサイの信徒への手紙1,1-23節をもう一度読んでみて、《神をますます深く知るように》という箇所だ。

私の友よ、私たちの運動の第一の問題は…第一の問題は、共同体を組織化することではなく、告知を続けることだ…何よりもまずこのことを思い出させるものでなければ、君と私の間に友情はない…

自己意識が動き出す瞬間と現象を正確に捉えて、驚こう。つまり人間、主体が動き出す、私たちの人格が動くその瞬間を。最初の、最初の瞬間、絶対的な意味での最初の現象…イニシアチブは、《必要な》イニシアチブは、思い出したいという望みだ。朝起きた時、君たちは、朝起きた時、何を望んでいる？私たちの脳裏に、私たちの意識に、私たちの魂に、本能的に現れる数々の望みを乗り越えるためには、確かに努力しなければならないし、私たちはこれに抵抗し、すべてのきわみに、主を思い出す望みに至るためにこの数々の望みを突き抜けなければならない！朝の祈りはそのためだ…

すべてがこの究極の岸に到達しなければ、もろくて何もない哀れな存在である君や私が、自分を救い、自分を満たし、自分の飢えと渇きを満たしてくれるものを待って、自分自身と世界の支配者にならしめるもの—私たちはそのために生まれてきたのだ。私たちの実質である「あの方」に倣って—、すべてがこの岸に到達しなければ、すべては無意味になる…

したがって、価値とは、避けられない歴史的な「存在」を、歴史に介入した永遠の事実を基準に、この「存在」をあらゆる瞬間の全内容の基準にすることだ。私は、君たちの愛情や興味、人間的な楽しみから君たちを引き離そうとしているのではない。私は君たちを導いている、私は君たちを、愛情、興味、快楽が考えられないほどの栄光の中で繁栄し、永続的になり、真実になる、すべての根源に導こうとしてい

る...

このイニシアチブの成熟度、能力は、歴史とともに成熟していく…私たちはこのイニシアチブを阻んではいけない。裏切りのためであっても、最も卑しい裏切りは忘却と、常習化している放心、思い出すことができていることに気づいたときの落胆だ。できていないことに気づいたときの落胆は、断ち切らなければならない細い紐のようなものだ。この失望感にとらわれないようにしよう！なぜ、できなかったかわかる？なぜ間違えたのかわかる？なぜ気が散っていたかわかる？なぜ私たちが卑劣であったか、卑劣にも忘れてしまったかわかる？なぜ私たちが昨日 100 回、1000 回も裏切ったのかわかる？なぜだかわかる？神は、今日、今、君がこの失敗を、「彼」のことを思い出す道具とするために許されたのだ…何回目？100 万回？100 万回のうちの 100 万回。常に...

この道は歩みながら学ぶものだ！やりながら成熟する。だが、道がわからないのにどうやってできるのだろう？だから、この歴史の、この歩みの規則、基本的なルールはただ一つ、従うことだ。従うこと！その人がどのように歩んでいるかは別として、この道を知っている人に従うこと。なぜなら、師は、確実に、説得力を持って、証しながら道を示してくれるからだ。

君が成熟するためのプロジェクトは、君からは生まれない...人生で大切なことは、師を認めることだ！なぜなら、師は選ぶのではなく、認めるものだからだ！師を選ぶというのは、テモテへの第二の手紙の 4、3-5 節にあるように、自分の考えや屁理屈の暴力に従うことを意味する。

それは権威と呼ばれている、そう、権威と呼ばれているが、お願いだから、君たちが使っている権威についての冒涇的な概念を捨ててほしい！なぜなら、それは本当に死体、ミイラになっているから。君たちが持っている権威の概念は化石だ。それは猛烈な組織体系であり、そういうものに出くわすと怒りが煽られ、激怒する。なぜなら、それは人と同じになることでは全くなく、価値観としてのその人、その人の価値観に自分を重ねることだからだ。なぜなら、その人は君よりもけちかもしれないし、君よりも独占欲が強いかもしれないし、あまり賢くないかもしれないが、もし君が師と認めたとしたら、それは彼の言葉や話し方に見出した価値観によるものなのだ！価値観によって。価値観とは何だろう？瞬間を運命に関連付けることを、理解させ、訓練させるものすべてのものだ。瞬間を成している内容に応じて、ガールフレンドとの関係、父や母との関係、教師との関係、政治家や君の機嫌を取らないから重たい共同体との関係だ。

これで終わるが、友よ、私はもろい。なぜなら私はこの従順によってのみ生きているからもろいのだ。今私が私であるのは、生きている従順によるのだ。人々、人々を介するしるしに、神が出会わせてくれた人々であるしるしに従うことによるのだ。けれども、過ぎ行く時間の中で、常にこれらの人々に従いながらも、時間の経過とともにますます明らかに、そしてはっきりしてくるのはキリストが唯一の師であるということだ。《君たちの師は一人だけだ！》<sup>32</sup>

私がもろいのは、この従順を生きているからだ。キリストへの従順を生きている人々、共同体や導かれている運動への従順を生きているからだ。キリストに従うこと、それだけがすべての理由だ。キリストに従うこと、これが唯一追求すべきことだ。私はもはや自分自身に実質を持たず、思い上がりの中で、自分自身を暴力的に誇張することで構築した確信は一つもない。

そうすると人生は、自分の考えや意志の努力でつくり出したのではない、自分のうちにある光、確実性、愛情に向かって進んでいくのだ。自分のうちにある確信と優しさ、確信と愛情を見出すのだ。従うことによって。

## まとめ カロン

これが、わたしたちを腹の底からとらえ、他の多くの人々と同じように去っていくことから救ったのです。つまり、人生・いのちへの熱意、わたしたちを夢中にさせたキリスト教の考え方、生き方、提案の仕方です。それによって信仰は、自分自身を変える道として、理性的で説得力があると自らを証明したのです。カリスマとは、キリストがわたしたちと有意義な関係を築き、わたしたちを惹きつけ、神の「教会」においてわたしたちが彼に属することを具体的に体験できるようにするために選んだ方法です。それは、別の世界ではなく、この世界において、ありのまま、それを貫くすべての挑発と緊張を伴って、《不確実な時代》に、わたしたちの時代の荒波の中を航海することによる方法です。《カリスマは、まさに主がわたしにとって、そして他の人にとっても同様に、出来事となる時間、空間、性格、気質、心理的、情緒的、知的方法を表す》<sup>33</sup>のです。

この独特の賜物によって、《全体へ》と開かれることを可能にするのです。《カリスマは、完成した民、つまりすべてを包括する普遍的な民の創造のために存在するのである。》<sup>34</sup>

---

<sup>32</sup> マタイ 23,10 参照

<sup>33</sup> L. Giussani - S. Alberto - J. Prades, *Generare tracce nella storia del mondo*, op. cit., p. 128 逐語訳

<sup>34</sup> 同上、p. 129 逐語訳

そこで、テイラーの質問をもう一度取り上げると、わたしたちは、逆の方向に進む流れの力に圧倒されるのではなく、この方法、この顔、この《わたしたちが託された教えの形》<sup>35</sup>を通してわたしたちに会いに来たキリストの存在に“とらわれ”、惹きつけられたのです。それは、他の人には「教会」の中の他のカリスマであるように、わたしたちにとってはドン・ジュッサーニに与えられたカリスマなのです。そして、それはわたしたちの中に、多くの大人たちの中に、そしてあまり当然ではない、多くの若者たちの中に、《主の存在を意識すること》、すなわち信仰が開花したのです。これによって、わたしたちは《主と一緒にいること》による人生の新しさ、わたしたちが夢にも思わなかったような豊かさを経験し始めたのです。教皇が繰り返されているように、この世において《強引な改宗活動によってではなく“人を引き付ける”》ことで《教会は成長する》<sup>36</sup>というのは、何と真実なのでしょう。

なんという恵みでしょう！実際、キリストが顔や話し方、カリスマの説得力のある方法を通してわたしたちを魅了し、今日も魅了し続けているというのは。それはわたしたちのイニシアチブではなく、聖霊のイニシアチブだから、恵みなのです。カリスマの賜物は恵みであり、その継続も恵みです。それは、わたしたち一人一人に問いかけ、一人一人にかかわり、刺激し、責任を要求する恵みです。

《人生で大切なことは、師を認めることだ！なぜなら、師は選ぶものではなく、認めるものだからだ》というドン・ジュッサーニの言葉を今聞きました。どうやって認めるのでしょうか。「教会」が、すべての運動や信徒の集団に対する教皇庁信徒・家庭・いのちの部署から示された基準に従って、指導者を変更し、それから必要に応じて規約を修正するように求めているこの時に、わたしたちはどのようにその人を認めることができるのでしょうか。

わたしたちは何度も《権威は、その人が生きているものによって、その人がしている経験によって与えられる》<sup>37</sup>と繰り返してきました。1980年にジュッサーニはいくつかのCLの共同体を担当する司祭たちに向けて、《もしわたしが[ある]ことを望むなら、神は、それを生きている人たちから、すでに生きている人たちから学ばせる。》と話しました。方法は常に《人生は、生きている人に従うことで学ぶものだ。その人が自分より優れているからではない！その人はあなたより何億倍も劣っているかもしれない！しかし、方法として、人生・いのちに対する姿勢として、態度として…適用する態度としては、模範になる。模範に従うのであって、言説に従うのではない》<sup>38</sup>というものです。

ドン・ジュッサーニは別の機会に、師、権威は、《心の要求とキリストが与える答えとの間のつながりが、より透明で、より単純で、より平和な場》であり、《権威は存在であって、言説の源ではない。言説もまた、存在の実質の一部であるが、それは反射としてのみである。要するに、権威とは、その人を見ることによって、キリストの言うことが心に一致するのだと、理解させる者のことである。このことによって民は導かれるのである》<sup>39</sup>と述べています。では、師を認めるために何よりも必要なのは何でし

---

<sup>35</sup> J. Ratzinger, «Dall'intervento di presentazione del Catechismo della Chiesa Cattolica», in L'Osservatore Romano, 20 gennaio 1993, p. 5 逐語訳

<sup>36</sup> フランシスコ、使徒的勧告 福音の喜び, 14

<sup>37</sup> L. Giussani, *Una presenza che cambia*, Bur, Milano 2004, p. 364 逐語訳

<sup>38</sup> A. Savorana, *Vita di don Giussani*, Bur, Milano 2014, p. 571 逐語訳

<sup>39</sup> «Da una conversazione di Luigi Giussani con un gruppo di *Memoires Domini* (Milano, 29 settembre 1991)» in «Chi è costui?», supplemento a *Tracce*, n. 9/2019, p. 10 逐語訳



ようか。わたしたちの真の必要の本質の認識、フラテルニタ（CLの兄弟会）への最近の手紙に書いたように、明確な自己意識です。《全世界を手に入れても、自分を失っては何の得になろうか。》他に基準はないのです。なぜなら、師、権威は、生きるためにわたしの人間性が必要とするものが輝き出るのがよりよく見える場だからです。必要としているものは、カリスマの恵み、出会いの中でわたしたちを魅了し、わたしたちの人生・いのちを根底から変えた魅力、キリストの存在を具体的に体験させ、わたしたちの存在を織り成すすべてを細部まで変え、わたしたちを完遂するキリストの力です。

先ほど、《やりながら成熟する。だが、道がわからないのにどうやってできるのだろうか？だから、この歴史の、この歩みの規則、基本的なルールはただ一つ、「従うこと」だ。従うこと!》だと聞きました。

《神がわたしたちに出会わせてくれた人たち》に、主への道を具体的に歩めるように主の霊がわたしたちの前に置かれた人たちに従うことによって、つまり、《キリストに従うように導かれている運動》への従順によってキリストに従うのです。なぜなら、《キリストに従うこと、それだけがすべての理由だ。》

従うことによるのみわたしたちは《兄弟である人間に人生・いのちに関わる事実を勧める》ことができるのです。実際、《主は組織ではなく、人生・いのちをもたらすために来た》<sup>40</sup>のです。わたしがよく引用してきた言葉でドン・ジュッサーニは、《このような社会では、人生・いのち以外では何か新しいものを生み出すことはできない。つまり、どんな構造、組織もイニシアチブも持ちこたえることができないのだ。新しい生き方だけが構造、イニシアチブ、人間関係、要するにすべてのものを変革することができる》<sup>41</sup>と述べています。

ドン・ジュッサーニの生誕 100 周年を祝うことで、皆に伝えたいことは、わたしたちに達し、カリスマの独自性によってわたしたちを引き付け、自分自身に引き寄せ続けている、わたしたちの人生・いのちの命であり、今日の世界にとって「教会」の生活のあらゆる次元を説得力のあるものにするキリストの偉大さ、このことです。

だからこそ、わたしたちの歩みの新たなステップに立ち向かうために、わたしたちは賜物に何一つ欠けるところがないと言えるのです。

© 2021 Fraternalità di Comunione e Liberazione

---

<sup>40</sup> L. Giussani, *Il rischio educativo. Come creazione di personalità e di storia*, SEI, Torino 1995, pp. 61, 65 逐語訳

<sup>41</sup> «Movimento, “regola” di libertà», a cura di O. Grassi, *Litterae communionis-CL*, n. 11/1978, p. 44 逐語訳